



Title	躍動する無限「ホテル」の闇の奥：『ウェイ・イン』におけるアクターネットワークの生成と変化
Author(s)	渡邊, 克昭
Citation	大阪大学英米研究. 2023, 47, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99589
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

躍動する無限「ホテル」の闇の奥

ー『ウェイ・イン』におけるアクターネットワークの生成と変化ー

渡邊 克昭

はじめに

建築ジャーナリストでもあるウィル・ワイルズの第2作『ウェイ・イン』(2014)は、巻末の謝辞に記されているように、『錯乱のニューヨーク』(1978)の著者として名高い建築家、レム・コールハースの現代都市論「ジャンクスペース」から着想を得て執筆された。「ジャンクスペース」とは、「スペースジャンク」を反転させたコールハースの造語である。彼によれば、「^{スペースジャンク}宇宙ごみが宇宙を汚す人間のゴミだとすれば、^{ジャンクスペース}がらくた空間は人類が地球に撒き散らすカスである」(324)。このように没個性的な空間が際限なく拡散していく「宇宙的」な恐怖に魅了されたワイルズは、『ウェイ・イン』を、伝統的なゴシック小説の道具立てに必ずしも頼ることなく、「ゾンビ的な環境」に彩られた「建築小説」として創作したという(“Interview with Will Wiles” n.pag.)。

それを裏付けるかのように、この異色のホテル小説は、表題が示唆する通りどこへも逢着することなく、ゾンビのように増殖し続けるメガホテル・チェーンを舞台として展開する。主人公ニール・ダブルは、こうした巨大ホテルにて開催される企業向けのビジネス・イベントに代理出席することで報酬を得るという一風変わったニッチ・ビジネスを^{なりわい}生業にしている。このたび彼が宿泊するウェイ・インは、グローバルに急成長を遂げるこのホテル・チェーンが誇る最新のホテルであり、「ジャンクスペース」の最前線とも言うべき様相を呈している。

このように本作には、空港や会議施設と直結する快適にして広大な公共空間が、皮肉にも、人類が撒き散らすジャンクよろしく地球を覆い尽くしつつあるという、目下進行中のシナリオが暗い影を落としている。「二一世紀に入って建設中のジャンクスペースの量は、二〇世紀に生き残ったものの量をすでに超えたいし」(325)。かく指摘するコールハースによれば、われわれ人類は「ジャンクスペース」のブラックホールに呑み尽くされる運命にある。「ジャンクスペースが地球全体で進化した状態が、『明白なる使命』^{マニフェスト・デステイニー}の最終地点だ。公共空間としての『全世界』^{ザ・ワールド}」(353)にあっては、「ランドスケープはジャンクスペースになった」(354)のである。

こうした洞察は、デジタル化が加速度的に進み、建築資材がモジュラー化しつつある現在、この惑星が、気候変動とも相まって、紛れもなく人新世を迎えたことを的確に言い当てている。かくも大規模に地球上を席卷し始めたジャンクスペースは、融通無碍に組み換え可能であり、その本質はまさにそれ自身のフラクタル的反復にあると言ってよい。だとすれば、そのように奥行きを欠いた無機質的空間にあっては、陰影を帯びた歴史が褶曲し、複雑な地層を成して堆積する余地はもはやないように思われる。だが、『ウェイ・イン』が異彩を放つのは、没個性的なホテル空間を装いつつも、それを逆手に取って換骨奪胎し、人間とモノとが影響を及ぼし合うアクターネットワークの迷宮を精緻に描出してみせたところにある。

本論は、アクターネットワーク理論 (ANT) を援用しつつ、この小説において人間とモノが織りなす錯綜した連関を分析することにより、そうした多様なアクターが、共生関係において異種混淆体としていかに変容を遂げ、生成変化していくか、その動態を明らかにしようとするものである。

アクターネットワーク理論の視座より

テキスト分析を始めるにあたって、まずはテクノロジーと人間の関係性を参照点として、アクターネットワーク理論の基本的な枠組みを確認しておこ

う。テクノロジーをニュートラルな道具とみなす社会構成論では、技術的な人工物がいかに作られ使用されるかは、あくまでも人間の欲望や作為によって規定される。それとは対照的に、テクノロジーそのものを自律的な営みとみなす技術決定論にあっては、機械や装置といったものがどのように作られ配置されるかによって、逆に人間の行為の方が規定される。前者の立場においては、テクノロジーは人間が自らの目的を実現するための単なる「仲介項」となり、社会が織りなす関係においては副次的なものに過ぎない。それに対して後者の思考に従えば、人間はテクノロジーが特定の目的を実現するための「仲介項」でしかなく、科学こそが外部から社会にパラダイムシフトをもたらす。だが、こうしたいずれの立場も、テクノロジーと社会を二項対立的に捉え、様々な現象の動因が人間か非－人間かのいずれかに還元されてしまう点においては、大きな違いは見出し難い。テクノロジーと人間をめぐるこのような議論を、一方による他方の支配という図式に還元するものとして批判してきたのが、アクターネットワーク理論である。

ブルーノ・ラトゥール、ミッシェル・カロン、ジョン・ローらによって提起された ANT は、人間がテクノロジーを制御しているわけでもなく、逆にテクノロジーが人間を支配しているわけでもなく、両者は、第3のエージェントとして生成変化を遂げるという洞察に集約される。ANT において行為を規定するのは、「媒介項」を介してテクノロジーと人間が結びついて生み出される人間と非－人間のハイブリッドな様態に他ならない。この理論では人間以外の存在もアクター、もしくはアクタントとして、人間を含む他のアクターと対等な関係を切り結ぶ。一方、人間もまたそのような連関によって生み出される一つの効果として措定され、両者が連携して日々生成するネットワークにおいて新たな現実が構築されていく。こうして人間と非－人間のアクターの結びつきが活性化するにつれ、二重のエージェンシーを内包するハイブリッド・コレクティヴ異種混淆の集合体のありようが、新たに魅力的な分析対象として立ち上がってくる。

このような ANT の思考の枠組みは、科学技術人類学、経済地理学をはじめ

めとする社会科学の斬新な方法論として、近年少なからぬ影響力を及ぼしてきた。ANT に対しては、人と非－人間が完全な対称性を保つことなど現実にはあり得ない（Collins & Yearley 312-17）といった批判や、事象の分析が事後的にして平板であり、行為の意図や前史は問われることがない（青山 133）といった批判もなされてきた。しかしながら ANT を文学テキストの分析に援用する際、そうした懸念は必ずしもこの理論の有効性を損なうものではない。というのも、フィクションにおいては、人と非－人間がエイジェントとして完全に対等な立場を保つことは十分可能であり、そもそも事後的性質を帯びた語りを通して、歴史的パースペクティブをもってアクターネットワークを検証していくこともまた可能だからである。

実際のところ、これまで ANT の事例研究として、フィクションが組上に載せられることはほとんどなかった。とは言え、物語における異種混淆的なエイジェンシーを抽出し、人と非－人間が織りなす錯綜した網の目をダイナミックに描出することにより、新たな読みの地平が開けてくる文学テキストは無数に存在するように思われる。まさにそのような視座より『ウェイ・イン』を分析してみることは、従来のホテル文学の批評の枠組みを脱構築するという点においても意義があろう。本論では、ホテルというトポスを、複数のアクターが相互に作用する場として捉え、主人公と表題のホテル・チェーンが、幾多のエイジェントたちを巻き込みつつ、互いの連関を組み直すことによって、自らの歴史にいかに向き合っていくか、躍動する¹ウェイ・インの闇の奥を探っていきたい。

ニール・ダブルのホテル人生

ダブルとこのホテル・チェーンの関係性を論じる際、まずもってイベント参加代行業²といういささか怪しげな彼の「天職」（45）が、ホテルという特異な空間なしには成立し難い稼業であることは注目に値する。「もし退屈でなかったなら、この仕事には就かなかっただろう。退屈さこそが僕を魅了

する」(13)とまで言い切る彼は、自らの正体を偽装しつつ、依頼者の代理^{ダブル}としてイベントからイベントへと世界中のホテルを飛び回る気ままな旅暮らしについて次のように述懐する。「僕はホテルの客室で目を覚ますのが好きだ。ホテルの部屋なんか没個性でどこでも同じようなものだろう。他の人なら気が滅入ってしまうそういうところに僕は大きな喜びを感じてしまう。ホテルというものに初めて足を踏み入れてからというもの、自分はホテルの虜となったのだ」(6)。没個性をこよなく愛するダブルにとって、何よりも快適さと匿名性が保たれる「ホーム」は、世界中に遍在する画一的なホテル・チェーンの客室の中にこそ立ち現れる。「一番のお気に入り」は、ホテルだった。行き届いた気配りの接客と、外界から隔絶された安堵感。グローバルに展開するチェーン・ホテルはさながら群島であり、それぞれの島が僕のホームだった」(45)。

互いに名も知らぬ宿泊客が常に行き交い、非日常的なイベントとその場限りのアバンチュールに彩られたこの眠りの帝国にダブルが限りなく魅せられるのは、「そこには力が漲っており、ホテルでは自分が別の人間になれる」(199)からでもある。であればこそ彼は、「能力拡張された、何の負荷も負わないホテル人間として、できるだけホテルと長時間関わることのできるような戦を探した」(199)のである。このようにディーに告白したとき、彼が口にした「能力拡張」という言葉は、自分が「現状維持^{ステイタス・クワオ}志向そのもの」(Allan n.pag.)でありながら、その一方で無限の潜在力を秘めたホテルとの一体化を希求するトランスヒューマン的願望を図らずも物語っている。ダブルにとっては、ウェイ・イン・チェーンはことのほかお気に入りであり、世界中に五百軒以上展開し、どれもが百を超える客室を誇る(15)このホテルは、成長に次ぐ成長を重ね、アメリカの東西海岸と西ヨーロッパでは地図を埋め尽くしてしまうほどの盛況ぶりを見せている(76)。とは言え、まだこの時点で、彼にとってウェイ・インは、独りよがりな自己拡張の欲望を充足するのに好都合な客体として「ホーム」でしかなかった。

だが、そうしたダブルの自閉的でナルシスト的な姿勢は、ある事件が引き

金となって思いがけなく綻びが生じる。その余波は、たちどころに彼のもとにフィードバックし、彼を取り巻く環境はにわかに変調をきたす。すなわち、ウェイ・インに隣接するメタセンターにおいてミーテックス社が開催するイベントに代理出席しようとしたダブルは、顧客を装って接触してきた同社のイベント・マネージャー、トム・レインの計略により自らの正体を明かすところとなり、窮地に陥る。かくして匿名性を脅かされたばかりか、すべての認証システムから拒絶されたダブルは、あれほど慣れ親しんだウェイ・インの迷宮の虜となっていく³。このことは、ホテルとの同一化を目論む彼の夢が潰え、アクターとしてウェイ・インに絡め取られた彼が、ポストヒューマン的存在へと変貌していくこと意味する。

実際、彼の客室の Wi-Fi 電波が急に弱くなったり、不意にクロックラジオからノイズが流れ、電源を抜いても一向に収まらなかったりするといった異変は、彼がこれから足を踏み入れようとする不分明な「閼」への越境を暗示している。それと共振するかのように、彼の意識において前景化されるのが、ディーやヒルバートといったホテル・チェーンの内部に棲息するエイジェントたちである。

既に 4 年間、そこに滞留し続けているというディーは、この稀代のホテルが未来永劫、成長し続けるべく、用地として有望な土地開発や、それに付随する高速道路網やインフラ設備の拡充が見込めそうな場所を世界中から探り当ててくるという重大な任務を担っている。創業以来、赤いネオンサインをロゴとしてきたウェイ・インにおいて、この赤毛の女が、ホテルのグローバルな展開に不可欠の壮大なメガ・アクターネットワークの構築に密かに携わってきたことは注目に値する。

ダブルにとっても、あらゆる業界には自らを稼働させる独自のアクターネットワークとロジスティックスが存在することは、身をもって実感してきたところである。彼によれば、「いかに瑣末な商品であっても背後にはその業界が存在し、大小を問わずいかなる商品でも、それを生活の糧にする競合する幾多の企業とその何千という従業員によって支えられている」(72)。その

ような観点に立てば、替え玉として各種のビジネス・イベントへ参加することにより生活の糧を稼いできた彼もまた、奇妙な立場ながら、そうした不可視のネットワークの末端に連なっていたと言ってよいだろう。

「内なるホテル」への誘い

ダブルがディーの姿を初めて目にしたのは、保守的なイスラム国、カタールのドーハのウェイ・インに仕事で投宿した際、彼女が全裸でロビーに出現し、取り押さえようとしたホテルのスタッフに激昂して修羅場を演じたときであった。それ以来、強烈な印象を与えてきた彼女が、まさに今、時空を隔てて唐突に蘇ったかのようにダブルの眼前に姿を現したのである。再会を果たしてから携帯電話を持ち去られたばかりか、亡霊のごとく自在にホテル内を渡り歩くディーに翻弄されるダブルだが、彼らはともにアクターとして連携関係を保ちつつ、ウェイ・インの迷宮を探究する旅に乗り出す。夢遊病者のように時空を超えてホテル・チェイン内を彷徨うかと思えば、瞑想に耽る彼女は、大学時代、数学を専攻し、位相幾何学を学んでいたという。ダグラス・ホフスタッターの『ゲーデル、エッシャー、バッハ―あるいは不思議の環』（1979）を愛読する彼女は、ホテルの随所に飾られた抽象画が織りなすトポロジーの戯れを解説することにより、秘められたこのメガホテルの全貌を暴き出そうと日夜奮闘している。

彼女の「^{カートグラフィ}地図作成法」によれば、ウェイ・イン・チェインの各ホテルは個別に独立しているわけではなく、「内なるホテルとも言うべき一本の幹から伸びる枝みたいな様相を文字通り呈している。だから一つのホテルが延々と続き、いつでもどこかで新しい枝が伸び、新しい先端が突き出している」（210）という。したがって、大元の幹であり無限実体としての「内なるホテル」と、その枝葉をなす各ホテルは常に一体であり、両者は互いに感応し合う関係にある。だからこそ、「非ユークリッド多様体」（209）としてダブルを翻弄し続けるホテルの内部は、あらゆる結節点において繋がると同時に、

歪んでねじ曲がり、かつまた永遠にどこまでも続いていく。

ディーの告白によれば、そうした悪夢じみた位相をなすこのホテル・チェインの秘密に迫ろうとして、アントワープからドーハのウェイ・インへとワープしてしまい、醜態を演じたディーを、ウェイ・インは身を開いて迎え入れてくれた。そればかりか、ホテル・チェインの増殖のために即戦力となるアクターとして彼女を、無期限、無料宿泊の特別待遇にて処遇したのである (214)。とはいえ、六大陸を難なく移動できるディーにしたところで、この「内なるホテル」を稼働させているすべてのアクターの動向に必ずしも精通しているというわけではない。無限に更新され続けるウェブのごとく、日々、生成変化を遂げるアクターネットワークを俯瞰的に捉え、このホテルにおける自らの位相を掌握する特権的視点は、誰にも与えられていないのである。

まさにこの文脈において、ダブルとディーの前に立ちはだかるアクターとして、ウェイ・インの忠実な執事役を演じるヒルバートなる人物が重要性を帯びてくる。自らの「替え玉」^{スタンド・イン} (184) に仕立て上げるべくダブルに接近し、彼に無期限、無料宿泊の特権を申し出たヒルバートは、このホテルの化身のごとく有能なエイジェントとしてダブルの関心を惹く。ウェイ・インの創業当時からこのホテル・チェインに住み着いていそうな (313) ヒルバートは、あたかも永遠の生命を保ち、そこを終のすみかとしているかのようである。彼は、「文字通りホテルそのものから滲み出てきた」 (315) サイボーグしながら、人間離れした能力で空間を歪め、変幻自在に出没しては、ダブルたちを攪乱し続ける。

ディーに強烈なライバル意識を抱くこのホテルマンは、自己増殖を図りダブルを取り込もうとする過程において次第に凶暴な本性を現し始める。しかしながら、彼といえどもウェイ・インの化身ではない。ディーとダブルがアクターであるように、ヒルバートもまた、このホテル・チェインに取り憑く一介のアクターに過ぎないのである。

ウェイ・イン・ホテルとその仲間たち

このことは、ウェイ・インについても同様に当てはまる。ホテルもまた決して超越的存在ではなく、ヒルバートやディーやダブルたちと異種混淆的に関わるアクターの一つでしかない。言い換えれば、このホテル・チェーンは、一見そう見えるように、どこまでも平準化、効率化された没個性的な理想空間ではなく、人間さながら気紛れかつ個性的で、錯綜した生き物なのである。「このホテルはおそらく生きている。普通の意味ではないにしても。確かに何かを求め、語り、話し、見せ、示そうとする。気まぐれに。おそらく何か目的があつてのこと。このホテルの中で過ごしていると、ホテルが心をもっているように思えてくる」(220)。ダブルのこの言葉通り、ウェイ・インもまた、他のアクターと心を通じ合わせたり、反発したりするかのうちに、絶えず揺らぎを孕みつつ、躍動し続ける。

レインと和解した際に、ダブルが、「宿主と共生する寄生虫」、「消化を助ける腸内細菌」(251)といったメタファーで捉えたように、ウェイ・インとそれに関わるすべてのエイジェントは、常に立場が反転しかねない「宿主」と「寄生虫」として、相互依存関係にある。この見立てによれば、ヒルバート、ディー、ダブルの三者の間に生じる軋轢や合従連衡は、まさに「腸内細菌」の陣取り合戦の様相を呈しており、刻々と変化する状況は、さらにホテル・チェーン全体へとフィードバックしていく。その結果、「ウェイ・インは一つの生き物みたいに振る舞う。そいつは、このホテル内に生息するすべての人間、すなわちそのために働き、その壁の内部で出会うすべての存在にかかっている」(251)。

このようにすべてのアクターを巻き込んで相互に浸透する共生関係は、「翻訳」と言い換えてもよいだろう。ANTにおける「翻訳」とは、「ある原因を〔象徴的なものなどに〕移送する関係ではなく、媒介子の共存を引き起こす関係」(ラトゥール 204)である。敷衍すればそれは、「あるアクター

を起点にして種々のアクターが結びつけられ共に変化していく過程である」(久保 49-50)。そうした「翻訳」の過程を通して、様々なエイジェントが、単なる「仲介項」ではなく、互いの行為を変容させる「媒介項」として機能することにより、総体として多層的にネットワークが機能し始める⁴。言うなれば微生物叢ミクロバイオームの構成要素としてのヒルバートも、ディーも、ダブルも、そしてウェイ・インもまた、「翻訳」によって互いを巻き込み、非予定調和的に変容し続けることで、一つの生態系を保っていると言っても過言ではない。だとすれば、彼らアクターはすべて、自らを取り巻く多孔的な環境と網の目のように不可分に絡み合い、浸透し合っているという意味において、ステイシー・アライモが唱える「超身体性」“trans-corporeality” (2) を備えていると見なすことができよう。

だが、ウェイ・インの信奉者の「第一世代の最後の一人」として、「その淵源へと辿り着いた」(320) ヒルバートは、「無限世界に長く親しんだ結果、正気を失い」(295)、ホテルを神と崇め奉るカルト的な「伝道者」(320) へと変質したと考えられる。人間の範を超えてウェイ・インと合一しようとした彼は、いわば「自分の崇める神に直接触れてしまったがゆえに、消し去られる運命にある」(295)。ところがダブルは、そのように狂気を孕んだ「腸内細菌」ヒルバートに対してではなく、むしろ「われわれ人間みたいに繊細にして壊れ易い生き物に依存せざるを得ないこのホテルに対して憐れみを感じ」(295-96) てしまう。

逆に言えばこのことは、地球上の「人間空間を自らの空間に変容させようとする」(259) ウェイ・インの戦略が、ダブルのようなアクターとの共存なしには実現できないことを物語っている。彼が、「このホテルは、僕たちが話すように、互いを知るように仕向けてきたような気がする」(221) とディーに語り、彼女が、「連中より先にあなたと接触しておきたかった」(223) と応じるとき、暴走するヒルバートへの対抗軸として、他のアクターたちが暗黙のうちに切り結ぶデモクラティックな連帯関係がいつそう明確になる。というのも、彼らが織りなすポリフォニックな交渉こそがホテルの遊動空間

を組み替え、交差する複数の時空間に新たなアクターネットワークが立ち現れるからである。

ネオンサインとの邂逅

ここで注目したいのが、ダブルが自分史の分節点として、このホテルと内密に分かちもつささやかな歴史的接点である。そもそもウェイ・インは、カリフォルニアの小さなモーテルから、グローバルなホテル・チェーンへと急成長を遂げたが、創業以来、赤いネオンサインのロゴを使用し続けてきた。奇しくも、ホテルの自室の窓から脱出を果たしたダブルを再び迷宮の深奥に手繰り寄せたのは、半世紀以上前に使用されていた流麗な字体の「ウェイ・イン」のネオンサインだった。

母に同行してこのホテルを初めて訪れたときのことを想起しつつ、彼は、同心円状に卵型の石を配置した墳墓めいた黒い岩に誘われ、このホテルの内なる空間にタイムスリップする。彼が押し開けた黒い扉の向こうに広がっていたのは、一九五〇年代に遡る俗悪なアメリカのモーテルの廃墟だった。それは、一見歴史を超越した「ジャンクスペース」としてのウェイ・インが、忘却の彼方に封印してきたおぞましい記憶の〈ジャンクスペース〉に他ならなかった。乱痴気騒ぎの痕跡をそこかしこに留め、悪臭を放つこの異次元空間こそがウェイ・インの原風景をなしており、そこがかつては欲望の限りが尽くされた悦楽の園であったことを物語っている。

淫らな夢の残滓が散乱し、エントロピーが極限に達したこの記憶の^{リンボ}辺土の彼方には、火星のような不毛な砂漠が広がり、黒いスーツ姿の「ヒルバートの同僚」(300)を思わせる死体が点々と転がっている(294)。そしてその敷地には、トーテムポールさながら旧式の赤いネオンサイン⁵が、宴のあとの終わりなき衰退の相を見届けるかのように、ゴミ溜めと化したスイミング・プール⁶の上に聳え立っている。“WAY/INN/NO/VACANCIES”というネオンサインの“NO”の部分が消えた(292)この広告板は、自らの出自に取り

憑いてきた「空虚さ」“VACANCIES”を、自らの歴史の廃墟においてメタ・メッセージとして表出しているに等しい。ウェイ・インにとってこのことは、先取りされた未来への限らない拡張ではなく、むしろ逆に、襁を孕んだ自らの過去への撤収、換言すれば、「ホーム」としての自己の内面への収縮を意味する⁷。

このようなウェイ・インの原風景を目の当たりにしたダブルは、これまで自らが抱き続けてきた存在論的不安を口にするが、ネオンは、“WAY”の“Y”と“VACANCIES”の“ES”を点灯させて“YES”と答えたり、“NO”を点灯させたり、沈黙を守ったりすることで、彼の問いかけに即妙に対応する。こうして自らの記号を組み替え、コラージュのように提示するネオンに誘発され、ダブルもまた心の底に鬱積したわだかまりの源へと立ち戻っていく。その結果、記憶と忘却が交差する歴史の回廊において彼のトラウマティックな家族史が蘇るとき、彼とホテルの間にはある種の交換が実現し、両者はノスタルジックな記憶の踊り場へと回帰し始める。

ちなみにノスタルジアという言葉が「故郷」を表す“nostos”と「痛み」を意味する“algos”を共に含みもつことに鑑みれば、ダブルが想起する思春期におけるイギリスのウェイ・インでの両親の諍いは、このホテルの淵源をなすアメリカのモーターの乱脈ふりと時空を異にするにも関わらず、歴史の基底において通じ合っている。あのとき母が、愛人と密会する父の客室に踏み込んだことも知らず、十二歳のダブルは、ロビーにて恭しく差し出されたジュースを飲んで、心地よいホテルのサービスを満喫していたのである。このとき初めてホテルを体験した彼は、両親の離婚を決定づけたあの日の出来事について、それから長い時間をかけてジグソーパズルを組み合わせるようにして真相を突き止めようとする。「事件の枠組みをなすホテルは最初からそこに存在していた。そこは大人の出来事が起こる場所であり、息が詰まりそうな惨めな子供時代の対極をなしていた。つまりは向こう側の世界だったのだ」(298)。

こうしてあの日、父のホテルの客室が修羅場と化していたことをネオンサ

インに問い質したダブルは、「自分の人生で中核をなす疑問に答えが出た」(299)ように感じる。すなわち、多感な時期に父を奪われ、偏狭な善悪の基準を押し付ける母に反発した彼は、その呪縛から逃れるべく、男性として奔放に生きた父を敢えて模倣しようとしてきたことが明らかになる(299)。そればかりか、ダブルの子供時代の鬱屈した心情こそが、彼をホテルと密接に関わる気ままな旅暮らしの職業に就かせる遠因となっていたことが判明する。一方、ウェイ・インもまた、今は歴史の瓦礫と化した創業時のモートルの荒地に敢えてダブルを招き入れることにより、相補的なパートナーとして彼を歓待したと言ってよい。

このように見えてくると、ダブルが垣間見た創業期のモートルの無秩序状態とウェイ・インにおける彼の両親の痴話喧嘩は、一見無関係に見えながら、あたかも同心円を描くかのように過去へと回帰することにより、共振していることがわかる。翻って考えてみれば、そもそもこれら二つの精神風景は、マインド・スケープ直接的な体験に基づく記憶をもたないダブルが、歴史の証人であるネオンサインに導かれ、追体験した擬似的記憶に他ならない⁸。結局のところ、秘められた自分史に向き合った彼とウェイ・インが互いに培った共生関係は、ティモシー・モートンが唱えた「人間と人間ならざるものの共生的リアル」“the human-nonhuman symbiotic real” (13)と呼ぶに相応しいフラクタル的な亡霊性を孕んでいたのである⁹。

フラクタルの襞を押し開く

だが、このように互いに参照しつつ、共生的なネットワークを確立したウェイ・インとダブルの前に、反動的なアクターとして再び立ちはだかるのが古株のヒルバートである。ゾンビのごとく執拗に彼が再び出現するとともに、「ホテルのレイアウトは不規則になり、ますます迷路と化した。変幻自在に変化する床の傾斜と相まって、建物がストレスのあまり撓み、中枢に近づくにつれ自重で確実に歪んでいるようだった。それとも、迷路の中心は既

に見たあのモーターの光景だったのだろうか？」(319) ブラックホールを思わせるこうしたホテルの位相変化は、結末を前にしてヒルバートがダブルとディーを相手に繰り広げる活劇めいた対決において一層顕著に現れる。ヒルバーが咆哮すると、「目を閉じたダブの瞼の裏に、ゆっくり回転する途方もなく恐ろしいパノラマが一瞬、過った。抽象画の撚り合わさった球体が巨大な柱になっていった。これぞ真実、ホテルの真の姿であり、われわれすべての宇宙が庭の小石であっても不思議ではないフラクタルの連続だった」(332)。ホテルの外部に脱出すべく、絶えずトポロジカルに移動し、反転を繰り返してきたディーとダブルにとって、常に変貌し続ける非ユークリッド幾何学的な客室の抽象画のデザインは、導きの糸でもあり、狂った羅針盤でもあった。というのも、絵に描かれた図形のパタンそのものではなく、「額縁と額縁の間の潜在力に満ちた空間」(276) ^{ハイブリッド・コレクティヴ}こそが、異種混淆の集合体として無数の襞を孕んだウェイ・イン・チェインを特徴づけているからである。

逆に言えばこのことは、「万華鏡みたいに、ちょっとした変化が全体のパターンを変えてしまう」(310) このホテルが、メタモルフォーゼによって無限に増殖するフラクタルの連続でしかないことを暗示している。合わせ鏡に映ったダブルの無数の自画像の一人だけがヒルバートへと変貌したかと思うと、振り返った次の瞬間、すべてがヒルバートへと変貌した(261-62) ように¹⁰、ウェイ・インに蠢くアクターたちは、部分が全体であり、かつまた全体が部分であるという、自己相似的なテセレーションへと包摂されていく。

にもかかわらず、そのように「境界もなければ限界もない、人間の欲望を映し出した無限の構造物」(266)、ウェイ・イン自体も必ずしも自己完結しておらず、抜け穴がなかったわけではない。未だ完成しないまま放置されている空中連絡路がまさにそれに相当する。^{スカイウォーク}ウェイ・インとメタセンターを結ぶガラスとスチール製のチューブ状の歩行者専用通路は、高速道路を跨ぐ中央分離帯の真上で虚しく宙吊りにされていたのである。そのせいでダブルはこれまでメタセンターへのスムーズな移動を阻まれてきたわけだが、今度はやはりこのチューブこそが彼の脱出口となる。

ダブルとディーをそこまで追いつめたヒルバートは、そこが彼の神通力の臨界点であるかのように、急速に老化し始め、やがては空中へと霧散してしまう。他方、ダブルとディーとは言えば、生成変化する「生体」から排泄されたアクターよろしくチューブの断面から放出されたのち¹¹、イースト・ロンドンのロイヤルドックス・ウェイ・インへとワープし、チェックアウトを行うところでこの小説は幕を閉じる。

「ウェイ・インは三人の信頼できない下僕を一挙に失ったのさ。そいつは分かっていると思う。僕だって元の自分じゃない」(340)。ダブルのこの台詞を裏付けるように、もはやウェイ・インのアクターネットワークから離脱したかのようにダブルは、これまで疎遠だった母を訪ねてみるかもしれないと述べ、再出発への一步を踏み出す。だがここで、彼の脱出を、魔界じみたホテルという名のジャンクスペースからの解放として言祝ぐことはいささか短絡的に過ぎよう。これからもウェイ・インは、ダブルの代替としてまた新たなアクターを見つけ出し、さらなる創造的変異に向けて、その営みが途絶えることはなさそうである。ダブルにしたところで、これできっぱりとウェイ・インをはじめとする全世界のホテル・チェーンと決別できるわけでもないだろう。彼とホテルは、常に既に相互に浸潤し合い、持ちつ持たれつの関係にある。このことに鑑みれば、依然として「このチェーン・ホテルこそが、それ自身の論理として、自らのイメージにおいて世界を目に見えないかたちで作り直そうとする、巨大で抽象的な枠組みの触知可能な突端に過ぎない」(Jacob n.pag.)という見立ても、依然として説得力を失ってはいない。

以上のように見てくると、「われわれがそこで既に生きているディストピアを正確に描いている」(Allan n.pag.)この物語においては、ダブルの脱出劇をめぐる結末よりもむしろ、アクターたちが互いに織りなすダイナミックな関係性の変化こそが大きな意味をもっていたことがわかる¹²。躍動するエイジェントたちによって紡がれたそうした連関において、彼らはいずれも、一方的に能動的であったり、受動的であったりすることはない。彼らは互いに付き纏い、触発し合い、他のアクターの働きかけに応じるアフォーダンス

を有している。であればこそ、彼らは中動態の行為者のように、常に進行中の出来事に巻き込まれ、揺さぶられ、打ち震え、何にも還元不可能なアクターネットワークを紡ぎ続けてきたのである。

この物語においてウィル・ワイルズは、自らが打ち明けたように、コールハースに触発され、伝統的なゴシック的要素を用いることなく、「ゾンビ的な環境」に彩られた別様のゴシック的「建築小説」を著しただけではない。実際のところ彼は、一見皮相的で歴史の欠如したジャンクスペースを逆手に取り、フラクタルに秘められた記憶の襞を押し開くことにより、アクターたちの共進化的な関係を鮮やかに炙り出したと言ってよい。まさにこの文脈においてこの小説は、人間とモノとが織りなすアソシエーションからジャンクスペースを逆照射し、来るべき未来に開かれたハイブリッドなホテルの生態系を、失われた記憶の^{リンゴ}辺土より掘り起こしてみせたのである。

＊本稿は、科研基盤研究（C）「ポストヒューマン文学における異種混淆とデモクラシー—アクターネットワークの生成」（課題番号：T 22 K 003780）及び、科研基盤研究（C）「アメリカ文学におけるホテル的空間の文化史」（課題番号：19 K 00406）による研究成果の一端である。『ウェイ・イン』からの引用にあたっては、『時間のないホテル』茂木健訳、東京創元社、2017 年を参考にさせていただいたが、本論において使用した訳文は拙訳による。

注

- 1 本論文の表題の「躍動する」という巻頭の文言は、「生氣論的唯物論」を提唱するジェーン・ベネットの著作『躍動する物質—モノの政治経済学』（2010）に依拠する。彼女によれば、濃密な関係性の網目に捉えられた「人間はそれぞれ、驚異的に躍動し、危うく躍動するモノの異種混淆的複合体であり」（12-3）、「あらゆるモノもまた生氣に満ち、生き生きとしており、生の活力を備えている」（89）。
- 2 イベント参加代行業という業態は、すべてがリモート化されるコロナ禍の時代にあってはおそらく淘汰される運命にある。だが、ダブルの「天職」が孕みもつ代替性は、ホテルを構成する様々なモジュールがいつでもどこでも交換／組み換え可能であるというジャンクスペースの本質とも親和性が高い。

- 3 本作の書評においてサム・ジェイコブが、マーク・フィッシャーの「資本主義リアリズム」の概念を援用しつつ、述べているように、「サービス経済をめぐる論理の限りなく自己参照的なフィードバックのループからは逃れる術がないのである」(Jacob par.7)。
- 4 このことは逆に言えば、これまでダブルにとってジャンクスペースでしかなかったウェイ・インが、『義務的通過点』“obligatory points of passage” (Callon 26-27) として立ち現れ、アクターとして彼がそこに配置されていくことを意味する。『『義務的通過点』は『翻訳者』であるアクターの世界に〈もの〉や人間が出現する地点であり、『翻訳』はこれらの〈もの〉や人間を『義務的通過点』として配置する地図作成行為であることになる」(大塚 26)。
- 5 この小説におけるウェイ・インの代理表象ともいべきネオンサインの役割については、「荒涼と熱狂のあいだにはもう何も残っていない。ネオンは昔といまの両方を表象し、屋内は石器時代と宇宙時代を同時に想わせる」(330) という、コールハースの見解が示唆に富む。
- 6 本書の謝辞において、ワイルズはプールについて次のように述べている。「本作に登場するスイミング・プールは彼 [J. G. バラード] に捧げられている」(344)。この発言は、バラードが『ハイ・ライズ』において象徴的な意味を持たせて描いた巨大高層住宅内に設えられたプールを意識してなされたものである。住民同士の階級的対立により機能不全に陥ったこのプールは、たちまちゴミ溜めと化し、やがてはアポカリプティックな廃墟の相を帯びていく。
- 7 レヴィナス論において内田樹は、ユダヤ教の「ツィム・ツム」(ヘブライ語の原義は「収縮」)に言及し、「神の『収縮』が創造のための空間を生み出したように、凝縮された空間に、外部にはなかった「何か」、未聞のものが生成している」(182)と指摘している。この見解を、本論に即して生成変化という視座を意識しつつ読み替えると、ウェイ・インの「自己収縮によってできた『襞』である『家』には『内在性』(interiorite)という、『それまで存在しなかったもの』が新たに生成する」(内田 183)ことになる。
- 8 ダブルが直接経験することなく提示されたこの二つのヴィジョンについては、マリアンヌ・ハーシュがホロコーストの記憶の継承において提起した「後付けの記憶」という概念を用いて考察することもできよう。
- 9 『『ヒューマンカインド』(2016)においてモートンが述べるところによれば、「エコロジカルな目覚め」(62)をもたらす「共生的リアルにおいては「亡霊的な」X存在が発生する」(79)のみならず、「種とX種の多様体はフラクタル的である」(79)。

- 10 フロイト流に言えば、ホテルの客室係という「慣れ親しんだもの」から「不気味なもの」へと変貌したヒルバートは、実はダブルの *alternative ego* とでも言うべき存在である。合わせ鏡におけるダブルの自画像のヒルバートへの反転は、もしダブルがウェイ・インに完全にに取り込まれ、同化していたならば、成り得たかもしれないゾンビの鏡像としてヒルバートが描定されていることを物語っている。
- 11 このことは、ウェイ・インによって「体内化」されていたかのように見えるダブルとディーが、必ずしも十全に包摂されなかったことを意味する。彼らは、自分たちの一挙一動をデジタルに捕捉するホテルのキーカード・システムから解放されたのである。客室の鍵に変わって導入されたキーカードが、利便性と個人情報の関係において、ホテルと宿泊客の信頼関係にいかに影響を及ぼしたかについては、エスター・キーモレンの文献を参照のこと。
- 12 そのような視座に立てば、『ラボラトリー・ライフ』を著したラトゥールとウルガーが、エスノグラフィーの手法を用いて、実験室における科学的事実の産出過程を一種の「ストーリー」として分析したように、ワイルズは、本作において「フィールドワーク」的の手法を用いて、ホテル・チェーンの生成変化の動態を物語として提示したと言ってよい。

引用・参考文献

- Alaimo, Stacy. *Bodily Nature: Science, Environment, and the Material Self*. Indiana UP, 2010.
- Allan, Nina. "The Way Inn by Will Wiles," *Strange Horizons*, 28 July 2014, <http://strangehorizons.com/non-fiction/reviews/the-way-inn-by-will-wiles/>. Accessed 13 Feb. 2022.
- Ballard, J. G. *High Rise*, Liveright Pub Corp, 2012.
- Bennett, Jane. *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things*. Duke UP, 2010.
- Callon, Michel. "The Sociology of an Actor-Network: The Case of the Electric Vehicle." Eds. Michel Callon, John Law, and Arie Rip. *Mapping the Dynamics of Science and Technology: Sociology of Science in the Real World*. Macmillan, 1986. pp. 19-34.
- Collins, H. M., and Steven Yearley. "Epistemological Chicken." Ed. Andrew Pickering. *Science as Practice and Culture*. U of Chicago P, 1992. pp. 301-26.
- Fisher, Mark. *Capitalist Realism: Is There No Alternative?* Zero Books, 2009.
- Hirsch, Marianne. *Family Frames: Photography Narrative and Postmemory*. Harvard UP, 2012.
- Jacob, Sam. "Will Wiles' Way Inn: is there a way out?" *The Architectural Review*, 27 Dec.

- 2014, <https://www.architectural-review.com/essays/books/will-wiles-way-inn-is-there-a-way-out>. Accessed 13 Feb. 2022.
- Keymolen, Esther. "Trust in the Networked Era: When Phones Become Hotel Keys," *Techné: Research in Philosophy and Technology*, vol. 22, no. 1, 2018, pp. 51-75.
- Michael, Mike. *Actor-network Theory: Trials, Trails and Translations*. Sage, 2017.
- Morton, Timothy. *Humankind: Solidity with Nonhuman People*. Verso, 2016.
- Wiles, Will. "Interview with Will Wiles," *Paprika!*, vol. 3, no. 15, 1 Mar. 2018, <https://yalepaprika.com/folds/fiction/interview-with-will-wiles>. Accessed 13 Feb. 2022.
- . *The Way Inn*, Fourth Estate, 2014.
- 青山征彦「人間と物質のエージェンシーをどう理解するかーエージェンシーをめぐるて(2)」『駿河台大学論叢』37号、2008年。
- 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』せりか書房、2001年。
- 遠藤徹『ゾンビと資本主義ー主体／ネオリベ／人種／ジェンダーを超えて』工作舎、2022年。
- 大塚善樹「ハイブリットの社会学」上野直樹、土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーカーハイブリッドのデザイン』せりか書房、2006年、22-37頁。
- 久保明教『ブルーノ・ラトゥールの取説』月曜社、2019年。
- 栗原旦、伊藤嘉高、森下翔、金信行、小川湧司『アクターネットワーク理論入門ー「モノ」であふれる世界の記述法』ナカニシヤ出版、2022年。
- コールハース、レム『S, M, L, XL+ー現代都市をめぐるエッセイ』太田佳代子・渡辺佐智江訳、ちくま学芸文庫、2015年。
- ラトゥール、ブリュノ『社会的なものを組み直すーアクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019年。
- ラトゥール、ブリュノ、スティーヴ・ウールガー『ラボラトリー・ライフー科学的事実の構築』立石裕二、森下翔監訳、金信行、猪口智広、小川湧司、水上拓哉、吉田航太訳、ナカニシヤ出版、2021年。